



平成22年10月18日

卓話 『加賀藩の江戸三度』

浅田屋伊兵衛商店株式会社 取締役
東京六本木ロータリー・クラブ 会員

浅田 豊久 様



文化と文明という言葉はよく比較されますが、文化というのは情緒的満足度、文明は集団生活の知恵であり技術であるということを先人から聞いたことがあります。江戸時代は、実は現在の国の形とほとんど変わらないものがあります。

江戸と金沢を結ぶ飛脚便のことを江戸三度飛脚と申しておりました。出発日を出日といつて、9日、19日、29日に定められていました。同じく京三度というものもございました。これは朝廷へのいろんな手続き、儀礼等のやはり月に三度の飛脚便です。江戸三度は加賀藩の発行した藩札を表示することで飛脚さんは関所をフリーで通過できる。同じような流通通送の組織は尾州藩にもあったという記録が残っています。

発端は私の祖先の浅田屋伊兵衛が、加賀藩の初代藩主、前田利家卿が織田信長の前線で戦っていたとき、兵士の食料、馬の餌、ワラジなどの消耗品を前線に届けなければならなかつたことから始まりました。江戸三度飛脚が開業許可を加賀藩からいただいたのは、主にコミュニケーションツールとしての書状を江戸藩邸と地元加賀藩の間で運ぶのが目的でした。金沢、江戸間は530キロございますが、早飛脚で丸2日、中飛脚で7日、通常の歩きで8日、これが3月から9月の夏場の日数です。料金は、まげもの、紙包み、100匁につき43文4分という記録が残っています。書状は5匁まで8文。それからお金も運ぶ対象になっていて、1両から159両までいくら、500両までいくらと分けていました。それから為替。金沢で仕入れたものを江戸で決済するための為替システ

ムがこの飛脚制度によって維持されていました。

参勤交代では陣屋と本隊との通信が重要です。最大時で2千人近い人間が17泊の道のりを旅します。これにも馬の餌、侍の3度3度の食事、それから駕籠に1日ゆられるお殿様のために軽業師とか芸者衆が付いて行くわけで、そういった段取りを用意しなきゃいけない。そこで私どもの祖先が飛脚を仕立てて、殿様の到着まであと何時間かかるとか体調はどうといったようなことを先走りの隊の責任者のところへ届けて、それではということで地元の医者を用意するとか、そういうことがいろいろ想像できるわけです。

過酷で重責を担う江戸三度飛脚が何をもって働くか、その背骨の部分が名誉でした。加賀藩の紋どころが押してあると中山道から北陸道の北国街道の関所はフリーで走り抜けることができた。徳川家からお姫様お輿入れのときは葵の御紋が付いていて最も栄誉になつたということでございます。藩からの課税は免除という特典が半分、藩の命運を左右するような重要な書類のやり取りを担っていたという名誉が半分で、それが三度飛脚を江戸末期まで続けさせた原因です。

浅田屋伊兵衛という祖先が加賀藩から名字帯刀五人扶持を許されて昨年が丁度350年。菩提寺には私ども祖先の記録が全部残っております。ご静聴ありがとうございました。

